

フォリ・デ・ラ・
フォレ

sasagani

一三六八年の晩夏。呆れるくらいに果てしなく青い空の下、強ばった表情で歩を進めながら、トマはふと郷愁めいた思いを抱く。

平野一面に広がる麦畑は故郷のアラスによく似た風景だ。幼い頃のように麦穂の海をどこまでも泳ぎたくなる仄かな衝動を、トマは口の片端をうっすらと引き上げてこらえる。

「気持ち悪いよ、トマ」

右下からさえざるような声が発される。少女がトマの顔をいたずらっぽく見上げていた。

年の頃は十二、三。特徴は栗色の瞳と頬に散るそばかす、そして瞳と同色の髪に被せられた真っ赤なシャペロン（縁なし帽）である。

「思い出し笑いなんてしちゃって。君みたいな凶悪な人相の大男がニヤニヤしてるとこなんて誰かに見られたら、またどこぞの盗賊が襲ってきたかって思われちゃうよ」

トマは速やかに表情を元の通り強ばらせる。冗談にしても全く笑えなかった。

理由の一つはその風采容貌だ。少女の言うようにトマは異相の持ち主だった。がさがさの顔の皮は荒れ放題をさらに通り越し、まるで蛇や蜥蜴の鱗のように硬くなっていた。角張った大きな鼻。額と鼻のずっと奥に引っ込んだ目は小さくつぶらで、白目は黄ばんで黒目と二重の円を描くその眼は、後ろへ撫でつけた蓬髪と相俟って獅子のようだった。

異貌というだけでなく、トマは少女ならずとも見上げてしまうほどの長身である。広い肩幅と分厚い胸板が、身にまとう草臥れた黒い修道衣をはち切れんばかりに引き延ばしている。その不自然さは、やはり二本脚で立ち歩く獅子にしか見えなかった。

「うるさい、黙っているマリー」

猛獣のような男が小声でそんな台詞しか吐けないもう一つの理由は、赤い帽子のマリーの言葉が正鵠を射ていたからだ。

トマは元盗賊だった。徒党を組んで馬首を巡らせ、刃を手に幾度となく農村の収穫物を奪った。ただ奪うだけでなく、逆らう者は容赦なくその手にかけてたのである。

今思い返してみても、トマはそれが怨恨の元となる悪行だとはっきり認めることができるが、後悔の念は全く抱かない。若気の至りの過ちだなどとも思わない。あれがああとき己がいた場所の常識だった。

「悪行とはいえ、正気でやったことだものね」

くすくすとマリーが笑った。

その通りだ。己の心を読んだかのようなマリーの発言に驚く素振りもなくトマは思う。

何もかもがつまらなかった。全てがくだらなかった。トマが絶えずそう思うようになったのはいつからだろう。幼い頃に疱瘡で死にかけてからか。己の醜い容貌を自覚してからか。からかってきた悪童の鼻を拳でへし折って黙らせてからか。とにかくトマは人生が退屈で仕方なく、それを紛らわすために暴力という手段を用いる職業に就いたのだった。

年齢不詳の外見をしているが、トマはまだ二十七だった。盗賊稼業に手を染めたのは十七のとき、正確に言えば彼は北フランスのとある傭兵団に身を置いていた時期だった。

盗賊である以前に、トマは傭兵だった。当時のフランスは海峡を挟んだイングランドを相手取り、後の世に百年戦争と呼ばれることになる戦を繰り広げていた。

きっかけはポワティエでの戦いだった。飛ぶ鳥を落とす勢いで領土を拡げるイングランドのエドワード黒太子に、フランス王ジャン二世が五倍する軍勢をもってポワティエ南西の平原で矛を交えたのである。

――あれはひどい負け戦だった。

悔しいと思えるほど何かをする前に敗れていた。騎兵を主体とするフランス軍は、イングランドのお家芸である長弓の餌食となった。第一陣に立ったシャルル王太子の戦列はいともあっさりと崩れ、その端くれに加わっていたトマは何もできないまま這う這うの体で戦場から逃げ出したのだった。

その後、フランス軍はなおも強引な突撃をかけて矢の壁を破りかけたが、エドワード黒太子はすぐさま側面から騎馬兵を回り込ませて鮮やかな勝利を収めた。かくしてジャン二世はエドワード黒太子の捕虜となり、果たして敵地イングランドで没するところとなったのは四年前のことである。

「ちょっと可哀想だけど、けっこうな厚遇を受けてたからあんまり同情できないよね」

ジャン二世の厚遇の理由は、ひとえに身代金のためだった。捕虜とはいえ一国の王である。いや、一国の王だからこそ捕虜としての価値があった。イングランドがその身柄と引き替えに要求した身代金の額は、フランスの国家予算数年分にも匹敵するものだった。

囚われの身となったジャン二世に代わってシャルル王太子が国政を担うことになったが、父王の身代金を工面する前に、フランスには片づけねばならない問題が山積していた

「そうそう。疲弊しきった国の財政を立て直さなきゃいけないのに、大諸侯やら大商人やらが反乱を起こしたり……ああ、農民が領主への不満を爆発させてとんでもない暴挙に出た、なんてこともあったね」

マリーはトマの反応をうかがいながら言う。

まんまと忌々しげな顔を浮かべていたのは、マリーが付け加えた農民の暴挙の原因に己の非道の所業がずばり関係していたからだ。

ポワティエ後の頭痛の種は、膨大な身代金や広大な土地の割譲だけではなく、傭兵団が大きな脅威となった。戦仕事を生業とする傭兵たちが、休戦によって解雇されるとそのまま国内を荒らし回る賊となったのである。その傍若無人の振る舞いは、戦の後難などと呼ばれるほどのものだった。

餌食となった農村の者たちは当然の如く憤ったが、怒りの矛先は害をもたらした傭兵団ではなく、凶賊の手から自分らを守ろうとせず、貝のように城壁の中に籠もっていた領主貴族へと向けられた。武器になりそうな物を手に領主の城館に乗り込んだのである。

つい三日前の獲物が想像もできない行動を取った。そんな噂を耳にするなり、トマは一も二もなく野営地を飛び出した。なぜだかそこに、胸に空いた退屈の穴を埋める何かがあると直感したのだった。

トマが追いついたときには、農夫の集団は近隣の村の者を加えて三回りは膨れ上がっていた。

そのため、次々と領主貴族の城館を押し流していく激流に紛れるのはさして難しくはなく、むしろトマの方が自分の異物感を強く感じるほどだった。一度見たら忘れられない異貌のはずが、件の村の農夫たちすらトマには気づかなかったのである。

怨みのあるはずの相手を認識する余裕がないほどの狂奔ぶりを前にし、トマの方が戦慄を覚えた。それは軍隊とは全く異質な集団だった。戦場にはない蠢きようだった。鬨の声を上げるでも怒号を響かせる訳でもなく、静かに喉を震わせながら進む。トマの獅子の眼に、その激流は赤黒く染まって映った。

農夫らは一匹の大蛇のようにうねりながら城館の門を破り、衛兵を殺して城内に押し入り、領主とその家族を見つけ、そして……。

「領主は裸に剥いて鬨り殺し、女は犯して鬨り殺しにした。この世の地獄が現れたのよね」

マリーが口にした端的な事実を聞き、トマは違和感を覚えた。実際に目にした光景とかけ離れているように思えてならなかった。

身に着けていた装飾品と上等な衣服を剥がされ、裸で転がった領主の死体。水死体のように青白く膨張した腹に男性器が埋もれていた。それを切り刻む男たちの喜々とした顔。

夫人と令嬢も同じように着衣を剥ぎ取られたが、すぐに殺されはしなかった。領主ほどではないがムチムチと肉付きのいい夫人は一度に三人の相手をさせられていた。十四、五の令嬢は花開く前の蕾をあえなく刈り取られた。犬のような姿勢で、前後不覚になるまで代わる代わる突き上げられていた。

確かに阿鼻叫喚の地獄絵図だったが、トマにはそう映らなかった。獄卒の役を与えられた農夫たちの恍惚とした表情は、どこか神聖なものであるかのように思えてならなかった。

「狂気は神聖なもの——プラトンね」

唐突にギリシアの哲学者の名を出され、やや面食らうトマに構わず、マリーはそらんじるように言葉を紡いでいく。

「プラトンは『ティマイオス』において狂気について記しているわ。人間は正気の状態では靈感に満ちた真実の予見をなすには到り得ない。それができるのは眠っているときのように知力が縛られてる場合とか、神憑りによって異常を来してるような場合に限られる。つまり狂気は神が人間に与えたもうた予見の働きで、それを判断するのが周囲の正気の間人だってね。狂気は神の言葉の先触れ。でもトマ、君はそこに疑問を感じたんだよね？ 正気が弱まると狂気が強くなる——一両立しないものだって考えは本当なのかな、って」

トマは無言でうなづく。

「確かに、教会はこれから二百年かけて正気の位格を高め、狂気を貶めるように動いていくわ。狂気を近寄り難い恐ろしいものから滑稽で笑えるものとして考えるようになる。狂気を精神の病という箱の中に押し込めてしまうのよ。もしかしたら、自分たちが信じる神さまだってそういう分裂した精神の持ち主かもしれないってのにさ」

まるで未来を見てきたかのような口振りは、それこそ神憑っているようだった。

「なるほどな。狂気の淵に落ちた者は正気——つまり理性の汀には二度と戻れないと」

「でも、俺が見た人の狂気はそういうものじゃなかった。トマはそう言いたいよね？」

首肯し、トマはもう一度回想する。

あいつらは俺たちの納めた税で肥え太っている。その体を俺たちが好きにして悪いことがあるか。あの反乱を起こした農夫たちが口々に唱えていた文言である。そういう理屈で、彼らは盗賊と同じかそれ以上に残虐な仕打ちを領主貴族に与えていた。

そうだ。彼らにも理屈はあった。狂気の中で理性を保とうとしていたのだ。

ジャックリーの乱と呼ばれたその農民反乱はフランス北東部を席卷したが、三部会を上手く利用した王太子シャルルによって速やかに鎮圧された。トムは首謀者とされたギヨーム・カルルらの処刑を見届けた後、傭兵団に戻るのだが、それも二年前までのことだった。

ジャン二世の崩御に伴い戴冠し、シャルル五世となった王太子は次に対外遠征を決めた。外交上の目論見があった一方、傭兵に仕事を与えることで盗賊化を避け、さらに国の外へ放出させようというねらいもあった。傭兵隊上がりの総大将ベルトラン・デュ・ゲクランに率いられ、仲間たちが挙ってカスティーリャ王国へと向かうのを後目に、トマは傭兵稼業から足を洗って流浪の身となった。

目的があった。胸に空いた退屈の穴が埋まりはしなかったが、それがどのような形をしているのかはわかったような気がした。

狂気と正気は両立するものなのか。その答えが自分の感じる退屈さの正体につながると確信し、トマはあちこちで狂気めいた話題を探してはその場所や人を訪れていたのである。

トマは各地で様々な狂気と関わった。それなりに得るところはあったものの、満足のいく答えとは巡り合わないことに微かな徒労感を覚えかけていたのだが、そんな折りに出会ったのが赤い帽子のマリーだった。愛らしい容姿にそぐわぬ広範かつ深甚なる知識を蓄えていたマリーは、先ほどからのように心を読んだかのようにトマの願望を看破し、それが成就するだろう地を提示したのである。

「全く、見てくれは怖いくせに正気の塊なんだから。さあて、見えてきたわよ。君の疑問に答えをくれるだろう場所が」

トマははっと顔を上げる。いつの間にか、二人は丘の上に立っていた。古い街並と、その近くに広がる深緑の塊が眺望できた。

「狂気と夢想漂う古き森の土地、アヴェロワーニュへようこそ。ここに腰を下ろしたくなったら遠慮なく言ってちょうだいね」

さえずるようにそう言うと、マリーはトマの手を取って丘の道を駆け下りた。

ヴィヨンヌはアヴェロワーニュ地方の中心都市だという。かつてアウェロニアと呼ばれていた時代には存在せず、ローマ帝国による占領の直後に造られたというからおよそ八百年、クロヴィスがパリを首府と定めてからとほぼ同じ歴史を持つ街ということになる。

ヴィヨンヌには、カトリック最古の修道会であるベネディクト派の大聖堂があった。シテ島のノートルダム大聖堂に先んじて建てられたもので、こちらのファサードには双塔がなく、内装も荘厳さにおいてやや見劣りはするが、屋根の隅に置かれた二体の怪物像は比べ物にならない異様な迫力を醸していた。

「あのガルグイユ―彫刻家の情念がたっぷり注ぎ込まれててね。夜な夜な動き出しては創造主が疎んじる者を尖った鉤爪で引き裂いて回ったのよ」

猫の頭のハルピュイアと蝙蝠の飛膜を持ったサテュロスの彫像を指し示しながら、赤い帽子のマリーは相変わらずの口調で言う。

大聖堂を左回りに四半周したところで、トマはふと古びた街並みの一角が新しいことに気づいた。何気なく逆手にそびえる大聖堂の壁面を見やると、二十トワーズ（約四十メートル）ほど上のところ大きな補修の痕が認められた。明らかに自然な剥落ではない。

「この街は攻められたことがあるのか」

トマが訊うと、マリーはうなづく。

「八十年くらい前にね」

投石機の破壊痕にしては大きい。トマは破城槌を思い浮かべたが、あれだけの高さに届かせるのはまず不可能だ。それに何より―。

褪せしきっていない街角をもう一度振り返り、トマはその二つが直線で結べることを確かめる。これに因果関係がないはずがない。

「巨大な何かが街を壊しながら直進し、大聖堂にしたたかな一撃を食らわせた……」

トマがぼそりと呟くと、マリーはその傍らでご明察と言わんばかりにニヤニヤと笑う。

「ティターン、ギガンテス、ネフィリム。北方じゃあヨートウンやらベルグリスだのって種族がいるらしいわよ」

マリーが出したのは全て巨人族を意味する呼称だ。にわかに信じ難い話だが、あの痕跡を目の当たりにすると妙に信憑性があった。

「その何かはどこからやってきたと思う？」

トマは今いる場所と丘からの眺めとを頭の中で結んでみる。そんなことをするまでもなく、そこにあるのは鬱蒼とした森しかない。

「森から、巨人が……？」

「そう驚くことじゃないわ。こんなのアヴェロワーニュの不思議の中じゃわかり易い方。何せ人間の仕業なんだから」

「ただの人間ではないのだろう？」

「そう。ナテールという魔導師がいてね。同業者の中じゃ鼻つまみ者だったけど、降霊術の腕前

だけは抜群だった。その道を究めたナテールは、人間の死体をこねてつなぎ合わせて一体の巨人を創造したのよ」

話しながら歩き出すマリーにいざなわれるように、トマは建て直された一角に入った。

「巨人に壊されるまで、この路地は【魔導街区（カルチェ・マレフィキウム）】って名前だった。巨人騒動の原因は、その直前に行われた魔導師排斥の働きかけだと言われているわ。この【魔導街区】を巣穴にしていた魔導や妖術の徒の大半が警吏に捕らえられたり、街の外へ追放されたりしたの」

「巨人を使って街に復讐した理由はそれか」

「ナテールに限ってはそうじゃなかったんだけど、長くなるからその辺はまた今度してあげる。もし君がこの土地を気に入って、住み着こうって決めたらね」

トマは答えなかった。その誘いはここに来るまで何度となく受けていたが、決断するために必要なものをまだ見出していなかった。

狂気——その巨人の魔導師もそれに取り憑かれていたのだとしたら興味をそそられないでもないが、それだけではとても足りない。ジャックリーの乱からおよそ十年、ずっと求めていたものの答えになるとは思えない。胸に空いた穴を埋めることはとてもできない。

全ては森に赴かなければわからない。こんな街中をうろついているばかりじゃ埒が開かない。トマはそう思った。

「フエー」

ぽつり、とマリーが呟く。

「何だと？」

「妖気を帯びている——って意味よ」

この辺りにうっすらと立ちこめる異様な雰囲気のことを言っているのだ。

言われてみて気づく。ああ、似ているじゃないか。なぜマリーがそんなことを言い出したのかはすぐにわかった。これは戦場の臭いだ。それも戦が終わった後の、そこら中が死体で溢れた合戦場の臭いじゃないか。

「瘴気なんて呼ばれてもいるわね。何でそんなものが街の中を漂ってると思う？」

「【魔導街区】だからじゃないのか？」

「かつて轟めいていた魔導師から湧いて出たと？ 残念、そうじゃないわ。だったらどうして造り直されたただの街区にそれが漂ってるのよ？」

魚は川に、土竜は穴に、ということらしい。ではその瘴気の出所はどこかといえば……。

「それも、やはり森……なのか」

「ただの街区を造り直すなんて馬鹿馬鹿しい話よね。城壁で隔ててもなお浸透してくるような濃密な気配の中で暮らせる人間なんて魔導の徒くらいしかいないのに」

「道理で人の気配がほとんどないはずだ」

「今住んでるのは五人かそこらだそうよ」

「平気なのか？」

「大丈夫でしょ、魔導師だもの」

「魔導師は追放されるんじゃないのか？」

「何をしてるのかわからない人たちだよ。お上に協力的な魔導師は滞在を許されたの。あの子みたいな、ね」

マリーの視線の先を追うと、小走りでこちらへやってくる男の姿が見えた。

「やあ、マリー！」

駆け寄ると、満面の笑みで小さな手を取る。

「お久しぶりね、ル・シヨドロニエ」

マリーが微笑み返すと、ル・シヨドロニエと呼ばれた男は表情を一転させる。

「本当に、生きてるんだね……てっきりあの黒死病の村で死んでしまったものと……」

感極まった様子で目から大粒の涙をこぼす。

まるで子どものようだが、ル・シヨドロニエは小太りで口髭を蓄えた中年男だった。右手にだけ手袋をはめ、まるで役人か小貴族のような整った身なりで、トマの考える隠者然とした風情とはかなりかけ離れた印象だった。

「実際、役人さんとして【魔導街区】だったここである務めを果たしているのよ。世俗にまみれて信心の薄くなった教会じゃあとても手に負えないものの相手をしてるのよ。ね？」

「最低限の役割しか果たせてないけれどね」

「また一、謙遜しちゃって」

「本当に大したことないんだよ。それに、その仕事も近いうちに辞めようと思っててね」

「へえ。辞めてどうするつもりなの？」

「もちろん魔導の探求さ。今の生活だと、どうも片手間になってしまっていていけないんだ」

「ってことは、この街から出るのよね？」

「ああ、ペリゴンに移ろうと考えてる。アヴェロワーニュから離れはしないよ。こうしてマリーも来てくれたことだしね。しばらく留まるつもりなんだろう？」

「あはは、まあね」

そんな会話を横で聞き、トマはマリーがこの地を訪れたのはおそらくこのル・シヨドロニエとやらに会うためかと考えた。なるほど、愛しい男との感動の再会か。魔導師ならばこの不思議な少女との釣り合いも取れるだろう。

「そんなんじゃないわよ」

マリーはトマの脇腹を肘で小突く。軽く触れたようにしか見えなかったが込められた力はしたたかたかたか、分厚い筋肉を持つトマが思わずくぐもった声を漏らすほどだった。

「確かに、ここに来たのは友人に会うためよ。この子よりもずっと古くから付き合いのある友達にね。私とこの子は、君が考えたような関係ではないわ。ねえ、ル・シヨドロニエ？」

「悲しいけれど、その通りだね」

複雑げに答える魔導師にトマは訊ねる。

「その友人とやらはどこに？」

「連れてきているよ、ここにね」

ル・シヨドロニエは手袋を外し、手の甲を表にして中指にはまった指輪を見せた。そのくすん

だ紫色の宝石の指輪がどうかしたのか。トマが訊いかけるより早く、マリーはル・ショドロニエの右手に飛びついた。

「きゃー！ ひっさしぶりー！」

しがみついてやいのやいのと騒ぎ始める。

「ちょ、今外すから、ちょっと待ってくれよ」

ル・ショドロニエから指輪を渡されたマリーは、いっそう声を跳ね上げて宝石に話しかける。もちろん指輪の方からの返事はない。おそらくはトマの耳に聞こえないだけで、両者の間では意思がしっかり通じているのだろう。マリーならばそういうことがあり得る。

「ねえ君、森に入りたいんだってね」

話しかけてくるル・ショドロニエに、トマはうなずいた。

「もうすぐ鐘が鳴る。そしたら門が開くよ」

そうなのか。マリーからは何も聞かされていなかった。暢気に街の案内をしていたのは、その時刻を待つためだったらしい。

「どうしてその時間に？」

「戦いが始まるからさ」

「何と戦うんだ？」

「決まってる。日常さ」

思いもよらない答えだった。

「誰だってそうだろ？ 戦うのは何も貴族や兵隊だけじゃない。祈る者、耕す者、働く者。職人だってパン屋だって、娼婦だってそうだ。毎日何かと戦っている。自分の立場を弁えて、自分の役割をこなしている」

トマは大いに納得した。戦うこと。ああそうだ、それが全てだ。それが世の中を形作っている。戦争だけが戦いじゃない。その通りだ。穏やかな暮らしも戦いに他ならない。

自分の立場と役割。人がそれを忘れたとき、人が作る社会は崩れていく。戦争を生業とする傭兵が戦う相手を失って農村を略奪するようになる。領民を守るべき貴族は役目を放棄して壁の内側に籠もる。そして、耕し、実らせ、税を納めていたにも関わらずされるがままにされた農夫たちが貴族へと牙を剥く。

「立場と役割がないのは、俺のような世捨て人か魔導師くらいのもの、というわけか」

「そのはずが、今の僕は立場と役割を持った魔導師に成り下がってしまっているのさ」

苦笑しつつ、ル・ショドロニエは一振りの鉈を差し出した。

「使ってくれ。森は深いからきっと役に立つ」

受け取って、試しに抜いてみた。相当使い込まれた感がある柄。刃はよく研がれており、さらに切れ味とはまた違った迫力をまとっていた。ただの鉈ではない。魔導の道具に違いない。件の森はこんな物が必要な場所なのだ。

「遠慮なく借りておこう」

簡単に死ぬつもりはなかったが、求めたものを見出せずに命を落とすのも馬鹿らしい。刃を鞘に戻して腰にくくりつけたちょうどそのとき、大聖堂の方から鐘の音が響いてきた。

「気をつけてね、トマ」

指輪との歓談を中断し、マリーが言った。

「思ってもいないことを言うな」

「そんなことないわよ」

「心配だと言うのなら、戻るまで大聖堂で無事を祈り続けてくれ」

「あはは、それはやだなあ。これからル・シヨドロニエのところで九月のピューレを聞こし召しながら昔話に花を咲かせるんだから。君こそ、早く帰ってきて晩酌に付き合ってよ。クシムの赤ワインは最高なのよ？」

「餓鬼の人外と飲んで何が楽しい」

「あらら、かわいくないんだ。ま、とにかく変なのに引っかからないように。何せ森は人間にとって有害なもの――サタンよりも古い原初の邪悪な霊も潜んでるんだから」

マリーがここまで念入りに忠告することは滅多にない。

「ああ、わかった」

素直にうなずくと、トマはゆっくり開くヴィヨンヌの城門へと足を向けた。

ヴィヨン又東の城門から出たのはトマ一人ではなかった。合わせて三十人ほど。そのほとんどが同じ背格好をした男たちだった。

二十数人が同じ色褪せた藍色の雨合羽を着込み、伐採用の斧を手にしている。おそらく同じ作業に携わる者たちなのだろうが、フードを目深に被り、行軍さながらに無言のままアヴェロワ一ニュの森の外縁に到達すると、誰かの指示があるわけでもなく横一列の陣形を取った。そして長柄を振り被り、木々の幹へと分厚い刃を叩きつけたのである。

ぜんたい何が始まったのか。どうして木を伐るのか。城壁のすぐ近くを開墾して畑を作ろうとするのではなく、木材を調達するにしても、伐るならば森の端の若木ではなくもっと奥まったところのものの方がいいだろう。

「いやあ、ご苦労さんだねえ」

そう呟いたのは長身瘦躯の男だった。トマに劣らぬ上背だが、目方はおそらく半分もない。不気味なほどの痩せっぷりで、頬骨は皮を突き破らんばかりにせり出し、首の筋と鎖骨はくっきりと浮かび上がっている。

「にいさん方も負けずに励んでくださいよ」

痩せ男は引き連れた四人の男を振り返る。

森に出たのはトマと合羽の男たちだけではなかった。貴族の使いらしき者や荷車に乗った行商人などの中に、その目的が判然としない五人組の一行がいた。痩せ男以外の四人は一抱えもある大樽を一つずつ背負っていた。雇われた人足なのだろうが、雇う側とおぼしき痩せ男が裕福そうでないのは明らかだった。

ふと、痩せ男がトマの方を向いて口を開く。

「旦那、赤帽のお嬢ちゃんと一緒にいたね？」

じろじろとトマを眺めてきたかと思うと、痩せ男はやけに愛嬌あふれた笑顔を浮かべた。

「おいらはナジエってもんで。そちらは何と仰るんで？」

「トマという」

答えながら、トマは面倒臭い相手に絡まれたなと思う。その予感の的中し、ナジエは森に踏み入ってから親しげに話しかけてきた。

「旦那あ、さっきの合羽の連中が何してたかわかります？」

トマははっきりと迷惑げに首を横に振るが、ナジエはそれを全く意に介さない。

「あいつらはね、木を伐るために働いてるんじゃないやせん。森をこれ以上広げないために働いてるんでさ」

壁の内側で聞いた話とつながる内容だった。

「瘴気の侵入を防ぐためか」

「さすがは旦那。話が早いね。んなら、巨人の話もご存知でしょ？ ええ、ええ、もちろんご存知のはずだ。その巨人騒ぎの後に創られたのが、あの合羽の連中なんでさ」

「創られた？」

「ええ。森の伐採は、そもそも例の巨人を持ち出したナテールってえ魔導師が一手に引き受けてたんです。降霊術の儀式で喚び出した死霊を死体に取り憑かせ、あの作業をさせていたってわけ。そこで得た実践的な知識を応用して巨人を創り上げ、アヴェロワーニュのあちこちで大暴れしたんでさ」

「さっきの男たちも操られた死体だと？」

「いえいえ。死体ってな元人間でしょ？ 連中は人間だったことのないゴーレムですよ」

ユダヤの律法学者が用いていた動く泥人形だとマリーから聞いたことがあった。

「この森は人の心を侵しやす。死霊とはいえ、人の魂を用いるってことはそれだけ危険がつきまとうってことで。もちろん巨人騒動の反省もあっての判断なんでしょうけど」

トマは得心した。そのゴーレムを使役しているのがあのル・ショドロニエに違いないと。

ナジエはその後一方向的に話し続けた。

彼もこの辺りの出身ではなく、生まれはブルターニュで、それもかのデュ・ゲ克蘭と幼なじみらしい。数々の悪質ないたずらをした悪童仲間だったが、長じて戦仲間にはならず別道を歩むことにしたのだそう。

アヴェロワーニュにやってきたのは三年前。ここは彼が学んだとある職能の師と縁のある土地で、亡くなった師の衣鉢を継ぐために訪れたのだとナジエは語る。

「んで、森のあちこちを回って師匠の行跡をたどってたんです。正しくは師匠の師匠に当たる人で、さらに言やそれがさっき話に出したナテールなんですけどね。そのナテール大師匠の遺産を三年がかりでようやく見つけたってわけなんでさあ」

どうやらこの痩せ男も魔導師で、その遺産とやらは男たちが背負う樽の中にあるらしい。

「おいら一人じゃとても運べないってんで連中を買ったんでさ」

「買った？ 雇った、ではないのか？」

「ええ、買いました。あの四人はこの辺りを荒らしてた盗賊の残党でね。迷惑してるからとっちめてくれってお役人の知り合いに頼まれたんで、適当な罠で捕まえて、叩き殺す代わりに手下としてこき使ってやってんです」

つまりは、何らかの魔導で言うことを聞かせているということだった。

「ところで旦那、一緒に歩いてたお嬢ちゃんは誰です？ 妹さん？ 娘さん？ それとも……って、おわっ！ そんな怖い顔しないでくださいよ旦那。冗談ですよ冗談」

「笑えない冗談は嫌いだ。おまえも魔導師だというのなら、あいつがただの小娘じゃないことくらいわかっているのだろう？」

「そりゃもちろん。だからこそ旦那を心配に思って忠告しようとしたんですよ」

「心配だと？」

「そらそうでしょ。あんなモンと平気な顔でお喋りするなんざ、ふつうの神経の持ち主じゃねえ。ありゃあ一流の魔導師が持てる知識と術理を余すところなく発揮して、さらに自分の命と引き替えにしてようやく姿を拝めるってほどの存在ですぜ？」

ナジエの言うことに異論はない。マリーが歳に見合わぬ内面を持っていると云々する以前に、人間ではないだろうことも感づいている。本人に確かめたわけではないが、出会ってから少なく

とも二度、トマはマリーが絶命するのを見たことがある。

「するってえと、旦那はそれを承知の上で？ ほええー。見た目通りの並外れた剛胆さですねえ。あんたならよっぽどのひどい目に遭っても死にはしねえだろうなあ。狂いに狂ったこの森にも、きっと気に入られますよ、ええ」

「どういう意味だ？」

「まんまですよ。この森は人を選ぶんです」

「すると、おまえも気に入られたクチというわけか」

「どうなんでしょ。そういうモンに嫌われないツボを心得てるのがおいらみてえな魔導師ってことですからね。ある程度は認められてるかもしれませんが、好かれてるってのとは違うんじゃないかなあ」

謙遜めいたナジエの物言いを聞き流しながら、トマは森の様子を観察した。

青々としたカシに、ブナの微かな秋色が混じる美しい木立である。聞いていたような狂気などどこにも見当たらなかった。

「旦那、こっちこっち」

ナジエがトマの袖を引き、獣道へと連れ込んだ。樽の男たちも無言でそれについてくる。

「どこへ行くつもりだ？」

「へへ、いいところですよ。どうせ行く宛もなくブラブラするつもりだったんでしょ？ なら滅多に行けねえところに行きやしょうぜ」

そこから二時間ほど、トマはナジエに付き合っただけで獣道を進んだ。

案内されたのは森の深みだった。広大な森林の中で最も深い部分——つまりは中心部で、進むにつれ木々の丈は高まり、枝葉の間から漏れ落ちてくる陽光も細く薄くなっていった。

「ブルターニュの由来がブルトン島にあるように、かつて夜で日数を記すドルイドらが住まい、アヴェロニアと呼ばれていたこのアヴェロワーニュにも由来となる土地があるんです。それがどこか、すぐに思いつくでしょ？」

ナジエがニヤリと笑うと、その行く手がさっと開けた。深い森にぽっかりと生まれた空隙のような場所に出た。頭上には無数の枝葉が絡み合い、天井のようになっていた。その大元には林檎の樹がある。見たことがないほど巨大な梢で、太さ二十トワーズはあり、高さに至っては判別できないほどだった。

おもむろに、リンゴの大樹の空隙が目映いばかりの光で溢れた。

どういうことか。あの幾重の層になった枝と葉の合間をすり抜ける光はほとんどない。にも関わらず、この明るさは何だ。トマは目を凝らし、その光源を探した。

交差する枝の中に一つの果実が見える。煌めく黄金の林檎——それが太陽の光にも匹敵する光を放っているのだった。

「うわあっ！」

声を上げたのはトマでもナジエでもない。樽を運んできた四人の男たちだった。それまでの虚ろな顔つきが一変し、冷や水をかけられたかのように覚醒した四人は、ひどく狼狽しながら背負っていた樽を下ろし、慌ててその場から逃げ出してしまった。

「あーあ、後光を浴びて魔導が解けたか」

ナジエがこぼすのが聞こえたが、言葉ほど落ち込む素振りはない。

「おいらはちょっとやんごとなき御方に拝謁を賜ってくるんで、旦那はここで待っていてください」

ナジエはおほんとか払いを一つして、恭しい所作で林檎の樹へと歩き出す。

その根元に、一人の男が横たわっていた。薄明かりの中でもわかる高貴そうな顔立ちで、どうやら瞼を閉ざして眠っているようだった。

トマはそこでアヴェロワーニュの由来に思い至る。アヴァロン——英雄譚に出てくる楽園の島。ここがアヴァロンだとすれば、そこに眠る人物は一人しか思い当たらない。

「アルチュス王、なのか？」

多くの高名な騎士を従えたというブリトンの王ということになる。だが、おかしい。アヴァロンであるはずがない。その所在はブリトン島にあるはずだ。

瞑目したままの男にナジエは身振り手振りで何かを訴えかけ始める。ふざけているのではない。むしろ鬼気迫ると言った様子だった。どんなことを話しているかはほとんど聞き取れない。降霊術やら錬金術だの、ゴーとマゴだの、創造主だか姿形だかといった言葉が時折届いてくる程度だった。もしかすると、ナジエは自分をアルチュス王の導き手であるメルランだと嘯いているのかもしれない。そう言えばメルランはブルターニュにあるプロセリアンドの森にゆかりがあったか。

そのうちナジエはおいおいと泣き出した。その痩せた体から絞り出すような号泣っぷりを見せながら、「新世界（ヌーヴォ・モンド）」という言葉は何度となく繰り返している。

そこで、きらりとアルチュス王の閉ざした眼の端が光ったのをナジエは見逃さない。

「失礼」

と言いつつ、さっと伸ばした手にはいつ取り出したのか小瓶が握られており、王の眦からこぼれ落ちた数滴の涙を過たず受け止める。

それを確かめるなり、ナジエは再び頭を垂れて非礼を詫びた。もう一度頭を深く下げると、王の真上にあった黄金の光が徐々に揺らめき、同じようにアルチュス王の姿も薄れて行って間を置かずに消えてしまった。

「ふいい、緊張したあ」

額に浮かんだ大粒の汗を拭いながらトマのところに戻ってくると、ナジエは一つの樽の蓋を外した。中には白くて硬質の破片がぎっしり詰まっていた。骨のように見えたが、だとしたらよほど大きな生物のものだ。牛や馬どころじゃない。

「こいつがナテール大師匠の遺産。ヴィヨンヌを襲った巨人の残骸さあ」

ナジエが頂戴したばかりの王の涙を一滴だけ垂らすと、しゅうしゅうと蛇が威嚇するような音と共に、樽から白い煙が立ち上った。

「大師匠は矮躯を馬鹿にされて巨人をこさえそうだが、おいらは違う。おいらは理想のために新たな巨人を創造する——おいらの巨人は新世界を支えるアトラスになるんだ」

樽の変容が終わった。トマがのぞいてみると、骨は白い粉になっており、中で何かかもぞもぞ

と蠢いている。と思うと、ぼふ、と粉を舞わせて毛むくじらの小さな顔が現れた。

「おお、この世へようこそ、グラングジエ！ おいらがおまえの生みの親だよ！」

ナジエは樽に手を入れ、顔を平たくした熊のような子どもを抱き上げて頬ずりをした。

体つきは五、六歳の男の子といったところか。それがナジエの巨人であるらしい。とても巨人には見えないと思ったが、生まれたての赤子と考えれば尋常ではない大きさである。

これが人と同じように成長すれば、なるほど巨人になるのかもしれない。ナテールは死人を用いて巨人を創造したが、孫弟子のナジエはその骨から赤子を産み出したのだ。

「あと三つの樽はどうするのだ？」

「それはおいおい。グラングジエが立派に成長したら弟や妹として……いや、息子や娘にしちまってもいいかもしれませんね。いひひ」

不気味に笑った後、ナジエは空を仰いだ。

「そろそろ日が落ちそうだ。とっとと森からお暇するとしましょうかね。んんん？ どうしたんですか、旦那？」

「……俺は残る」

「正気ですかい？ 森の夜はおいらみてえな魔導師でも危うい場所なんですか？」

「俺なら気に入られると、そう言ったよな？」

「そら言いましたけど……うーん。まあ仕方ねえか。だったら幾つか注意しとかなきゃなんねえ事柄だけ伝えさせてください。旦那にはまたお目にかかりたいですしね」

ナジエの話に耳を傾けながらトマは思う。正気ですかい、か。上等じゃないか。俺がここに来たのはそれを捨てるためだ。

林檎の樹の裏側に回り込んだトマは、空気が一変したのを肌で感じた。黄金の光に照らされた荘厳さでないのはもちろんのこと、薄闇のヴェールの中にいるのとも異なっている。周囲の植生すら変わったような気がした。

とにかく得体の知れない空気の中にいる。何が起こるのかわからない。満ち満ちる気配は息をひそめた獣が醸すものか。いや違う。この気配は獣の放つそれとは一線を画している。獣にはない、感情めいた昂ぶりめいたものがそこにはあった。

「これがフエーというやつか」

妖気を帯びている。まさしくそうとしか言い表せない。

大樹の根元には、大人二人が入れそうな穴がぽっかり空いていた。闇の奥を見つめながら、トマは別れ際のナジエの忠告を思い出す。

「まず踏み込んだじゃならねえのはそこです」

ナジエは林檎の樹を指して言った。

「その裏側はアヴァロンじゃねえ。ン・カイ——もっと忌まわしくておぞましい、この森の主の寝所へ続く黄泉路なんですよ」

腕の中で身じろぎする毛むくじゃらのグラングジエを宥めながらナジエは言う。

「森の主？」

「名前はサドクイ。ドルイドが崇めていた神の中でもいっとう旧くてとんでもねえ存在ですよ。そいつは怠惰な性分の持ち主なんですけど、一度興味を持った相手にやえらくしつっこくちょっかいをかけてくる。見たら一発でわかりやすぜ。蝙蝠みてえなツラで毛が生えた馬鹿でけえヒキガエル。それを見つけたらとっとと離れるべきですぜ……って、そもそもン・カイに入るなって話なんですけどね」

アルチウス王を丸め込むほどの魔導師がそこまで言うということは、よほどの危険に違いない。もちろんトマはそんな話を聞いたくらいでは止まらない。むしろ、なおさらそれを見たいと好奇心を強めてすらいた。トマの顔からそれを読み取ったナジエは、やれやれと肩をすくめながらアヴェロワーニュの夜の森で他に注意すべき事柄を手短に挙げていったのだった。

餞別代わりにとナジエから渡された松明に火を着けると、トマは穴に踏み込んだ。

一寸先も見えない闇の中、トマは右手に握った松明をかざし、左手で土壁を探りながら進む。湿り気を帯びた坑道だったが、足場は思ったより堅くしっかりとしていた。左に湾曲する壁伝いに下りていく。螺旋を描くようにして地の底へと続いているのだった。

下りるにつれて坑道は徐々に広まっていき、とうとうトマの巨軀が天井につかえず歩けるようになった——とそのとき、おもむろに広いところに出た。驚くほどの広さで、松明の小さな明かりで照らしきれるものではなかった。右も左も、天井の高さも全くわからない。

トマは感覚を鋭くして様子を探ってみた。

強い臭気。腐臭と汚物めいた臭いが入り交じっている。耳を澄ますと、じゃらじゃらという金属音と人のうなり声が聞こえてきた。

「誰かいるのか？」

呼びかけてみると、うなり声が強まった。それを聞くなり、トマは闇の奥へと踏み出した。囚われの者を救おうという正義感や義侠心を出したのではない。トマの脳裏に浮かんでいたのは、農夫たちの慰みものとなった貴族やその妻女の姿だった。

トマは自問自答する。俺はどうして近づいているのだ。あのとき農夫たちのように振る舞えなかった自分を情けなく思い、やり直して自信を回復させようとしているのか。

そうじゃない。俺は知りたいのだ。あのときの農夫たちの頭を満たしていたものを。貴族たちが陵辱の中で感じた恐怖を知りたい。そしてその先にある何かを。言い訳めいた思いを巡らせていたためか、トマは目にしたそれがどういうものか即座に理解できなかった。

それは大きな蛆虫だった。体節はなく、つるりとした白い胴体で、腹からは足とおぼしき突起物が四つ生えている。

じゃらじゃらと鳴っていたのはその首にはめられた鉄の輪から伸びる鎖だった。うわうわとうなりを漏らすのは、大きく崩れてはいたが目鼻と口を具えた顔に違いなかった。腹の突起物に再び目をやると、それぞれからさらに指のような小さな突起が出ているのがわかった。蛆などではない。顔。手足の痕跡。それは間違いなく人だった。

人であったもの、と呼ぶべきか。トマはごくりと喉を鳴らす。手足が萎えるなどという程度ではない。戦での怪我が元で四肢が不自由になった者を少なからず知っているが、それとも違う。そこにはうかがい知れない悪意が込められていた。トマは退化という概念は知らなかったが、眼前の様態がそれであることを直感し、さらに蛆虫へと変貌させられたそれが自分に何を訴えているかも察した。

介錯を懇願している。殺してくれと、哀切極まりなく訴えかけてきているのだ。

一体誰が、何のために。鎖がつながっている先の闇を照らし、トマは愕然とした。

鎖は鍾乳石に括りつけられていた。その向こうにパンパンに膨れた塊が見える。トマの上背を軽く超える大きさのそれは、どうやら何者かの腹であるらしかった。短い足が赤ん坊のように前へ投げ出されており、両脇からは腕がだらりと垂れている。その全てがごわごわとした剛毛に覆われていた。顔はいつそう醜悪だった。どろりと濁った横長の目。めくれ上がって額に届いている鼻先。半月のような形の耳朶。口は左右に大きく裂け、唇からは太い髭が無数に垂れ下がっている。

――これがサドクイか。

すぐ逃げろというナジエの再三の忠告を、トマは払い除ける。殺せるものなら殺してみろという気がふつつつと沸いてくるのはなぜだろう。人が人を――農夫が貴族をいたぶる姿には怒りを覚えなかったというのに。この人ならざる存在とやらが己と同じ人をいたぶっていることに憤激しているのか。

ナジエの言葉通り、立ち上がるどころか身じろぎも億劫な様子だが、濁った瞳の奥には企みごとめいた光が灯っていた。今のところトマに興味はないようだが、彼がこれから取ろうとしている行動を目にしたらどうか。

トマは松明を左手に持ち変えると、腰に下げた鉈を鞘から抜き放った。刃が突き立ったのは弛

みきったサドクイの腹ではなく、足下でもぞもぞと蠢いていた無毛の頭頂だった。

乞われたままに介錯をしたのだ。化け物の慰みものになって生きながらえるより、尊厳がわずかでも残っているうちに人として死にたい。トマはその思いに応えたのだ。

サドクイが髭の垂れた口をのたりと開き、ルロル口と長くだらしない雄叫びを発した。

トマはとっさに踵を返して駆け出す。これまでで最も有情の人殺しを果たし、トマの胸は沸き上がる意気にはちきれんばかりだった。

あそこまで巨体なら、ここまで下りて来た坑道には入り込めないだろう。駆けながら振り向いて見た光景はその目算を打ち砕く。

サドクイの雄叫びは未だ途切れず響き、それを発する醜い顔も元の場所にあった。さりながら、サドクイはトマを追っていた。立つことも走ることもなく動いていた。だらしない体が融けて形を失い、どろどろとした腐汁となって地面に垂れる。と思うと、前触れもなく跳ね上がり、怒濤となって迫ってきたのである。

トマは舌打ちする。大きく鈍重げだからこそ隘路ならば逃げられると算段していたが、不定形の体ならそれを苦にもしないだろう。坑道へと飛び込むと、トマは松明を前でなく後ろにかざし、追い縋ってくる腐汁の波を抑えながら螺旋状の道を上る。

半分ほど来たところで松明を投げ捨てると、トマは両腕両足の全てを使って残りの道程を駆け抜けようとした。狭まった坑道の彼方に丸く光る月が見える。あと一息だと飛び出そうとしたその右足首が何かに捕らえられた。猛烈な力で引き戻そうとするのを、トマは壁面を這う木の根を掴んで抗った。サドクイの考えは至って単純だった。壊れた玩具の代わりに自分をあの鎖に繋ごうとしているのだ。冗談じゃない。右足首がちぎれそうな痛みを耐えながらトマは思う。むしろちぎれてくれた方がありがたいとすら思った瞬間、引き戻す力が向きを一転させた。

安堵する間もなく、トマは逆流する胃液のように押し寄せる不定形の波に飲み込まれた。

目を覚ますなり、トマは辺りを見渡した。

厚い雲が月を覆っていたため見通しはよくないが、どうやらそこは葦のような下生えが繁茂する沼地らしいことがわかった。

トマの巨体は、水面から悪魔の角の如く突出するねじくれ曲がった灌木にボロ切れよろしく引っかかっていた。

まだ夜のうちだった。ほんのわずかな間の失神だったのか、それとも丸一日経ってしまったのだろうか。身を起こしながらサドクイに飲まれた際のおぞましさを思い出し、トマは魂からの震えを感じた。向こうはこちらに触れてくるのに、こちらからの手応えは一切ない。粘っているのに捉えどころはなく、振り払いようもなくまとわりついてきた。

――どうして俺は無事でいるのか。

胸の焼けるような臭気は髪や服にこびり付いている。間違いなく俺はサドクイに捕らえられた。地下空洞で見たように、鎖でつながれて蛆に変えられる運命を迎えるはずなのに、どうしてこんなところに放置されたのだ。何らかの邪悪な意図があるのか。もしやこの沼地もサドクイが変

じたものなのだろうか。

疑い始めたらきりが無い。トマはひとまずサドクイから思考を切り替えた。沼に下りると、脛の半ばまでが黒い水に浸った。底抜けに注意しつつ足を運び始めたところで、ふと雲の合間から満月が顔を見せた。

暗黒の中で頼もしいはずの月明かりが、このときばかりは暴かすともよいものを暴いた。

三ピエ（約一メートル）と離れていないところに大きな顔があった。獣の頭だった。

下顎から二本の薄汚れた長い牙が伸びている。鼻と耳の在処はわかるが、目がどこにあるのかが判然としない。やたらと盛り上がった額が隠しているのだ。まるで巨大な瘤のようだった。その額が、鼻の付け根からゆっくりとめくれ上がっていくのをトマは見た。

瘤に思えた額の盛り上がりは瞼であり、その内側に秘匿されていた大きな瞳が渦を巻いたように思えた。途端にトマは目眩に襲われる。呼吸が浅くなり、頭が重くなる。右に一步だけよろけたものの、気を失ったり、体勢を崩したりするまでには至らなかった。

それは単眼の獣だった。ナジエから教えられた邪眼の獣——見た者の心を奪い、ときに魂消させることすらあるというカトブレパスに違いない。カトブレパスはその一頭だけでなかった。獲物の気配を察知したのだろう、六頭が緩慢に集まりつつあった。

焦ることなく左肩を怒らせるようにして単眼から体ごと目を逸らせると、トマはひどい目眩と頭痛に苛まれながらカトブレパスの群を刺激しないようゆっくりと沼地を進んだ。

葦を掻き分けて何とか汀にたどり着く。人心地がついたかと思いきや、ここでもまた異なる森の住人がトマを注視していた。目眩と頭痛は消えたものの、今度は倦怠感と甘い痺れが全身を不自由にする。人の容貌をした十数の視線——それもまた邪眼らしい。

陶醉に似た感覚に抗いながら目を凝らすと、二種類いるのがわかった。数が少なく、生気がないのがアルテレ。〈のどからから族〉とかいう意味らしく、転じて人の血を啜る吸血鬼を指すそうだ。多くいる方はみな、蛇の頭髪を生やしたゴルゴーンだった。このアヴェロワーニューでは蛇の下半身を持つラミアと合わせてシャンブロウなどと呼ばれているらしい。

トマに邪眼を向けながら、彼らは動揺の色も見せていた。これだけの視線を浴びながら即死せずにいる。並外れた精神力というだけでは説明がつかない話であり、当のトマすらも不思議に思うほどだった。

「ま、旦那のその面構えなら邪眼も寄せ付けないでしょうがね」

ナジエの軽口の通り、凶々しい顔の造作がガルグイユのような魔除けとして機能したのだろう。何だ、人も異形も変わらないじゃないか。トマは苦笑する。どいつもこいつも俺の面相を前にすると、冷や水をぶっかけられたように我に返って怯えた様子を見せる。

トマは邪眼に逆らうのをやめた。機嫌が上向くまま甘美な陶醉に浸ろうとしたのだが、上手くはいかない。アルテレやシャンブロウどもの投げかけてくる力は、トマを酔わせるどころかますます渴かしていく。まるで身も心も砂漠になってしまったかのようなようだった。

——こんなものか。

トマは心底落胆した。アヴェロワーニューの夜の住人も所詮はこの程度か。俺を満足させられない。狂気の淵へ引きずり込むこともできないのか。微かな憤りのこもった足を踏み出すと、邪

眼持ちたちは視線を逸らし、闇の向こうへそそくさと消えてしまう。

邪眼の障りを退けたトマが森に入ると、今度は邪眼持ちではない夜の族が次々と姿を見せた。背丈が膝ほどしかない矮人たち。黒い肌で踵がなく、犬のような顎の食屍鬼たち。山羊脚のサテュロス。全身に刺青を入れた部族の男たち。森に迷い込んで夜を迎えてしまっただろう人間たちも混ざっており、ナジエから逃げ出した四人の男の姿もそこにあった。

三十、いや五十を超える異形の群が、同じ方向に向けてゆっくりと移動していた。誰しもが無言で、一様に瞳を陶然とさせながら。この森で初めて目にするその色は、ジャックリーの乱の農夫たちのものに似ているような気がした。邪眼に動きを止められるのとは逆で、何かに情動を突き動かされている。農夫たちが盗賊に味わわされた絶望を領主貴族への憤怒に変えたように、森を行く集団も何らかの目的をもって移動しているのだ。

そう判じると、トマはいつかと同じようにうねる狂気の渦に紛れ込んだ。やはり融け込みきれない己の存在感をトマは自覚する。異形めいた見てくれは彼らと大して変わらないはずなのに。農夫たちのときはいつ自分が異質な存在であることに気づかれるかと注意を払ったが、今度はそんな心配は無用だった。

異形たちはトマに目もくれない。あまりに見向きもしないので、逆にこちらからナジエから逃げた四人に近寄ってあからさまに顔をうかがってみるなどしたが何の反応もなかった。また魔導の虜になったのだろうか。それとも邪眼の影響を受けているのか。

群の足取りが止まった。列のほぼ最後尾から前をのぞいてみると、どうやら目的の場所にたどり着いたらしい。

木立の間になだらかな円い丘が見えた。樹木の生えていないその頂上に光が当たっている。もちろん白い月光なのだが、まるで天窓から差し込む陽光のように強かった。いや、今もその勢いは強まり続けている。

篝火に誘われる羽虫のように、矮人族が、食屍鬼が、半獣人が円丘をよじ上っていく。光を身に享けたかと思うと、白く染まった異形たちの体が溶けて混じり合ってしまった。

五十もの肉体は白い円柱状に凝り固まり、その表面に同じ数の死に顔を刻んだ巨大な蠟燭となってゆっくりと浮上を始める。その先を見上げると、月が四つに割れていた。

——月蜻蛉（ラゴゼヒオ）か。

呆然と、トマは思う。月蜻蛉——皓々と照る満月に十字影を落とすものとも呼ばれている、とナジエは言っていた。サドクイと同じく人智が遠く及ばぬ超常の存在で、空から地上に下ろした白い柱で己の信奉者を掬い上げ、我が身の滋養とするのだという。

白い柱が消え、月にかかった十字の影も消える。その信奉者でないからか、それとも再び魔除けの顔相のためだろうか。とにかくトマは選ばれず、唯一人取り残された。

しばらく満月を眺めていたかと思うと、トマは顔全体に皺を寄せ、目を血走らせて駆け出した。あらん限りの力を解き放ち、獣道も深い茂みも関係なく、低く唸りながらアヴェロワーニュの森を疾駆する。黒い修道衣が破け、全身に擦り傷が生じるのも構わない。

その胸を満たすのは悔しきと羨望の念だった。俺はまた、正気を保ってしまった。彼らのようになれなかった。あの農夫たちのように、今し方白い柱となった者たちのように、心身の全て

を狂気に浸すことができなかった。

もがきながら走るトマの姿は、まるで駄々っ子のようなようだった。俺はどうすればいい。どうすれば狂気に浸れるのだ。

アヴェロワーニュの森は何も答えず、静かな佇まいをもって寄る辺なき孤独の異形の苦悩を内包するばかりだった。

休むことなく駆ける中、真っ赤に染まったトマの視界に幻像がちらちらと浮かんだ。結んではほどける間隔が徐々に狭まり、はっきりと理解できるまでになった。

旅籠かどこかの一室で寝台に横たわる自分が見える。そこに赤い帽子のマリーがやってくる。どうやら幻像の中のトマは怪我か病で臥せており、それを見舞いに来たらしい。マリーはいつも通りの調子で言葉を投げかけ、自分もいつものように無愛想にそれに応じる。

「気持ちは固まったかしら？」

さほど長くはない会話の最後で、マリーはこう訊ねてきた。幻像の中のトマは質問の意味をすぐ理解できず、少し首をひねってようやくそれを思い出す。アヴェロワーニュに腰を下ろしてはどうかという話のことだ。

冗談じゃない。眺めているトマはそう思った。気に入るわけがない。ここも俺を受け入れてはくれなかったのだ。

さあ答えろ、俺よ。こんな珍奇なだけの土地に用はない。己が狂気からほど遠いことを改めて自覚させられた分、なおさら業腹だと。

しかし、途端に幻像が揺らぎ、その答えはうやむやになって消えてしまった。

いや増した怒りの矛先はどうしたものか。あの幻像は近い未来に違いない。これから起こることならば、そのときに己の口で否と告げてやればいい。そうだ、それでいい。そのために、まずこの忌々しい森を抜けなければ。

そのとき、おもむろにトマは怖気立った。なぜか先ほど頭の隅にやったサドクイの思考が理解できたのだ。意識を失う刹那、どういうわけかトマは不定形なる怪物の企図がいかに変化したかを理解していたのだ。

新たな鑑賞用の家畜を獲ようとしていたことには相違ないのだが、捕らえてみたときの激しい抵抗の様にサドクイは思い直したのである。即ち、鑑賞するにはするが鎖に繋いで手元に留めるのではなく、牧畜の如くあえて解き放ってみるのも一興か、と考えた。

――まるで人間じゃないか。

人知を超えたおぞましい存在が、そんな気まぐれを起こすのかとトマは思った。

そして、かように人心に興味を抱くサドクイが己と似ているように思えてならなかった。あの接触では思考のごく表層しか理解できなかったが、深いところではトマと同様狂気についての思索をしているのかもしれない。

とすれば、どういうことか。人ならざる怪物が人に近い思考をしているのか、それとも逆に人であるトマが怪物に近いのだろうか。サドクイが怪物の中での、トマが人の中での例外であり、人と怪物の彼我を隔てる境目の上に乗った同質のものなのだろうか。

答えは出ないが、もしサドクイがそれを悟ってトマの身を放ったのならば、トマにもわからな

い話ではなかった。いや、しかし……。

振り切ったはずの迷いが妙な形でぶり返し、トマの混乱と興奮はいや増した。

そこで、アヴェロワーニュの森の端に到達した。折しも夜明けである。うう、うう。鼻息荒く、朝焼けの差し込む木立を抜けたトマへと、ぶうんと風切り音を発しながら、分厚い何か振り下ろされた。

飛び出した勢いの中であって、トマはそれが何かを考える前に体をよじり、その動きに合わせて腰から鉞を引き抜く。金属と金属がぶつかる音。手は痺れさせるがままに刃を返し、ぐっと足を踏み込んで相手に飛びかかる。

フードを被った男。ゴーレム。振り下ろされたのは斧だった。トマは激情のまま鉞を相手の首筋に叩き込んだ。フードごと首が飛ぶ。血を全く迸らせず、男の体は後ろに倒れた。

ふうふうと肩で荒く息をした後、トマは天を仰いで大声を発する。降り注ぐ陽光が鬣となり、その様はまさしく獅子吼の体だった。

〈了〉

フォリ・デ・ラ・フォレ

<http://p.booklog.jp/book/53812>

著者 : sasagani

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/sasagani/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/53812>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/53812>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ